

### 魯迅の「多疑」思惟様式についての研究

尾崎 文昭

A Study on the style of the “多疑 (Distrustful)” Thinking of Lu Xun (魯迅)

Fumiaki OZAKI

魯迅の「多疑」思惟様式を分析するさいの重要なポイントとして、章炳麟から受けた影響を論じなければならない。初歩的な考察によれば、その思惟様式の基本的な特徴とまた彼の基本的な観点と共通するものを章炳麟の議論のなかに見出すことができる。しかしながら、章炳麟の思想がとりわけ難解であったために、個別の感想めいた指摘は多くなされてきたが、詳しい分析はまことに少ない。また、中国では、章炳麟の政治的評価が揺れ動いてきたために研究が進まなかったとも言える。

93年度は、関係資料の収集と既出論文の分析をすすめた。

これまでの数少ない資料の中で、比較的詳しく述べているのが、中国の李沢厚と日本の片山智行の論であり、また深い理解を示しているのが高田淳の論である。

李沢厚は80年代の中国文化界を代表する哲学者だが、近百年の知識人が果たしてきた役割を分析するなかで、初期魯迅と章炳麟の共通性を論じ、次の4点に整理している。(1)反資本主義的農民の立場にたつ。(2)物質主義を排し精神主義を主張。(3)多数による政治体制より個人主義を主張。(4)伝統のなかに民族再生の契機を求めた。しかし、比較的早い時期(1979年)の文章だからであろうか、旧来の紋切り型的な論断が多く、分析が表面的な類似性を指摘するだけに止まっていることとあわせて、筆者を納得させない。『略論魯迅思想的発展』『魯迅研究集刊』第一集所収)

片山智行は、まず高田淳の論を引用したうえで、主に

儒教批判の面から章炳麟と魯迅の論述を比較検討し、分析を進めている。高田淳の論は、魯迅のキリスト教的な神概念についての議論が章炳麟のキリスト教批判を延長発展させたものであるとの重要な指摘もしているが、詳細に論じているわけではない。(『章炳麟・章士・魯迅』)

片山智行は、魯迅の孔子批判が「支配の道具」として利用されていることの欺瞞性を指摘することが中心で儒教論理自体にかならずしも向いていないことを指摘し、これは章炳麟と共通するとする。また、章炳麟の儒教の「富貴利禄」追求批判と魯迅の「敲門磚」へのたとえがほぼ同じ視点であるとする。章炳麟は革命の必須条件として革命者の道德性の高さを強調したが、魯迅の国民性についての議論および後の鋭利な社会批判が、その章炳麟の議論を継承したものであるという。また、初期魯迅に明瞭に見られるニーチェの影響も「えせ近代主義」批判として共通すると言う。さらに、魯迅の空論批判・実行の尊重という特質も章炳麟とよく共通すると言っている。かなり詳しい分析と言ってよいが、やはり表面的な類似性を指摘するレベルに止まっていると言わねばならない。(『魯迅のリアリズム』)